

---

# 赤の破壊者

時間

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤の破壊者

### 【Nコード】

N4316Y

### 【作者名】

時間

### 【あらすじ】

真冬の冬。そんな雪が降っているある日。

血まみれの少年が公園で雪をかぶって倒れていた。

そんな少年を一人の男が少年を…。

## 登場人物

”死にたい” ただ…それだけが、僕の生きている理由だと思った。

白夜 びやくや 詩雅野 しがの

不明（見た目、17歳か18歳くらい）の男の子。

生意気だけど暗くて無口で笑わない。

ヴェンパイア族の生き残り。

いつも命を狙われている。

人の未来を見ることが出来る。

血は吸わない。いつも”死にたい”と言う気持ちを持っている。

時無詩 ときなし 静 しずか

18歳の男。

無愛想で無口で冷たい。

他人には無愛想であり笑わなくて無口だが、なぜか、詩雅野だけには結構生意気で優しい。

詩雅野と一緒に住んでいる。

詩雅野がヴァンパイアとは知らない。

とてつもなく、馬鹿力な能力を持っている。

## #1 雪どけのヴァンパイア

”死にたい”ただ…それだけが、僕の生きている理由だと思った。

バキユンツ!

「ハア…ハア…。」

「待て!この化け物が!」

「ハア…ハア…。」

「チツ…見失ったか。」

バシヤツ…タツ

一人の血だらけの少年が歩いていた。

誰も居ない、公園。

雪が積もって、雪が降っていた。

そして、血を流して、木にもたれる少年が居た。

「ハア…ハア…死ねる…。」

バタンツ

死ねるなら…一人で静かに死にたい…。

『生きて!詩雅野!』

ハツ!

「?!…。」

少年は包帯を巻かれてベッドに寝かされていた。

「…どこだ…ここは?…。」



シュッ！

銃の弾が背中にかすった。

「!?!?…クツ…。」

「化け物のくせに、傷はすぐに治らないようだな!」

「…殺したければ、殺せばいい。」

「何?」

「別に、こんな世界にいても、自由なんてない。

一生、お前等に追い続けられないといけないんだろ?」

「ああ…そつだ。なら、もう殺してやるよ!」

「……。」

「チツ。」

「!?!?…。」

少年はさっきの男と共に消えた。

「何!?!?」

「!?!?…お前…。」

「何してんだよ!死ぬ気か?」

「人間のお前に何が分かる。」

グイッ!

「?!?!?…。」

「いいから来い!」

男は少年の手をつかんで、一つの家(?)に向かった。

ガタンッ

ドアが開いた。

そして、一人の女の人が出てきた。

「初めまして、未来が見える能力を持っている白夜詩雅野君」ニッコッ

「!?!?…。」

「で、いきなりだけど、詩雅野君。ここで死ぬか、ここで生きて私の手伝いをするか選んで？」ニッコ

「…そんなの…」

「生きてここにいるに決まってる。」

「!?!?…なっ！」

男が詩雅野の代わり言った。

「そっか、私はこの家の主の董咲霽すみれさきみぞれ。よろしくね」「ニッコ

「ちなみに、俺は、時無詩静。よろしくな！詩雅野」「ニッコ

…。」

不幸だな…僕は…。

「じゃあ、静が詩雅野君の面倒見てね。それと、学校も行ってね」

ニッコ

「……。」

「返事は？詩雅野君？」

「はい…。」

「って、事は同じ部屋だな。俺等。」

「!?!?…最悪…」ボソッ

## #2 同居・学校

お前は、必要ない！存在の価値すらない存在だ！お前など存在しても誰も喜ばない！

ハッ！

「！？…ハア…ハア…。」

詩雅野は少し焦った顔をして起きた。

「…また…。」

詩雅野は時計を見た。

時刻…5：00　。

「…はあ…。」

気持ちが不安定な時いつもあんな夢を見てしまう…。

「…存在価値…。」

トントントン

ガチャッ

詩雅野の部屋に誰かが入ってくる。

「…詩雅野。おきてたのか？」

「静…さんは早いんだ。」

「別に。飯できてるぞ。」

「ねえ。」

「ん？」

「このアパートって皆住んでるの？」

「住んでるけど、なんだ？」

「いや…別に。」



二人は台所に向かう。  
詩雅野は椅子に座る。

「……。」

「どうかしたのか？」

「なぜだ？」

「昨日と違って、何かしょんぼりしてるからな。」

「別に……。」

「変な奴だな。」

「あんたもだろ……。」

「ほら。」

「?…なんだこれ？」

詩雅野の目の前には、目玉焼きと食パンが出てきた。

「はぁ? お前目玉焼きと食パンを知らないのか？」

「知らないも何も…食べた事も見たこともないぞ？」

「お前…一体何食ってたんだよ？」

「…分からない……。」

詩雅野は暗い顔をした。

「何で？」

「僕には、記憶がない。ただ名前と死にたいという気持ちしか知らない。」

「…はぁ…いいからさっさと食べるよ。学校行くからな。」

「…学校…? まあいい。」

詩雅野は食べ始める。

「うわぁ…お前喰い方がやばいな。」

「んぁ? 何がだ？」

「はぁ…ほら、いっぱいいついてるぞ。」

タオルで詩雅野の口の周りを拭く。

「???…。」

詩雅野はぼかんとした顔をした。

「面倒だ。」

「はぁ…もうこっち来い！」

「なんだ？」

静は詩雅野のネクタイを結ぶ。

「お前、何も出来ないのか？」

「分からない…だが、家族はいないと分かる。」

「なんだよ、それ。早く行くぞ！」

「…分かっている。」

ガチャッ

二人は家から出る。

「あっ！静！おはよう！」ニッコッ

「おう。麗」

「……。」

詩雅野は急に黙り込む。

「詩雅野？」

「…はぁ…。」

コケッ！

「！？…うわぁ！」

「詩雅野！」

詩雅野は階段から滑り落ちる。

ドンッ！ガタッ！

静と詩雅野が階段から落ちた。

「大丈夫！二人とも！」

麗が慌てて二人に駆け寄る。

「痛ッ…大丈夫か？詩雅野？」

「……。」

詩雅野は起き上がる。

「…大丈夫?…。」

「つて、お前こそ大丈夫か?」

「あっ…うん。」

「そうだ。私は麗。小室麗こむろれいよろしくね」ニッコッ

「…。」

「早く、行くか。」

三人は学校に向かった。

麗は静に話しかけているが、静はあんまり聞いていない。

詩雅野はどこかをずっと見ていた。

そして、学校。

「キヤアアア!!可愛い!」

「転入生の白夜詩雅野君だ。仲良くしてあげろよ。」

「……。」

詩雅野は無口だった。誰とも喋らず。

「存在価値などない…ヴァンパイアなんて…死ぬしか道はない…。」  
ボソッ

### #3 同居・花園

【詩雅野、ありがとう。私とっても嬉しいよ。詩雅野がいてくれるだけで！】ニコツ

お前も所詮は僕のものじゃ無い…。

「おい！白夜！白夜！起きろ！」  
ハッ！

「！？…。」  
先生が詩雅野を起した。

「どうした？顔色悪いぞ？」

「…あつ、大丈夫つす。」

「そうか？なら黒板の問題を解いてみる。」

「…x-8。」

「正解。」

詩雅野は窓から空を見上げていた。

人間は…自由でうらやましい…。

「詩雅野！おい。」

「ん？…。」

詩雅野は目を覚ます。

「お前な、弁当は？」

「飯？…ふわぁ…眠いからいらない…。」

「いいから、来い。」

詩雅野は静に連れ去られる。

廊下を歩くと。

「キヤアアア！静先輩と詩雅野君だ！！あの二人仲いいのかな？？」  
えらく注目されている。

「あっ！静！と詩雅野君。一緒にご飯食べよう」「ニコッ

「おう。」

「。。。」

薔薇一面に咲く、場所に来た。

ドクンッ！

「!?!?。。。」

「詩雅野？」

詩雅野の様子がおかしかった。

「。。薔薇。。。」

【詩雅野、薔薇の花言葉は”愛情”。私が詩雅野に愛情を注ぐから  
ね】ニコッ

「。。ハア。。ハア。。ハア。」

「詩雅野？」

「愛情。。薔薇。。存在価値。。。」

僕はなんだ？。。お前は誰だ!。。。

【詩雅野!】ニコッ

お前は誰なんだ!!!

『好きよ、詩雅野』

ハッ!



「詩雅野…。」

「そばにいてあげなさいな。」

「あっ…おう。」

静は詩雅野の前にある、椅子に座る。

「あつ、メイドさんー兎さんー。」

雲が兎の帽子をかぶっている少年とメイド服を着ている少女に声をかける。

「兎って言うな!」

「なんですか?」

「ちよいと、仕事してくれない?」ニッコッ

「いいぜ。」

「かしこまりました。」

#### #4 同居・双子（前書き）

なぜか、私の小説は双子が多いなあ〜WW  
本人、双子LOVEですねWW



#### # 4 同居・双子

「お兄様、新しい方はどんな方なのでしょう？」

「兎が知るわけないだろうが。」

「そうでございますか。」

「だが、依頼を受けたからには、やるしかないか。」

「そうでございますね」「ニコッ

「さっさと行くぞ。」

「かしこまりました。主。」

二人は歩く。

「う…う…ハア…。」

「…。」

ガラッ

「静、私行くけど、休む？」

「あ…行く。遅刻するって言うてくれ。」

「了解」「ニコッ

「頼んだ。」

麗は部屋から出て行った。

『詩雅野は、カツコイイよ。私を守ってね。詩雅野』「ニコッ

ハッ!

「!?!?…。」

詩雅野は目を覚ました。

部屋には詩雅野一人だった。

ガラッ

「…。」

「ご主人様、お茶をお持ちしました」ニコッ

一人のメイドの服を着た、少女が紅茶を机に置く。

「???…。」

カタンッ!

「?!…。」

そして、一人の兎の帽子をかぶった少年が詩雅野の前にある椅子に座る。

「うさぎは、衣織いおりの白兔しろうさぎ。」

「私は、衣織いおりの白葉しろはと申します。」

「……。」

「お前に話がある。」

「…。」

白兔が微笑んで言う。

「お前、未来が見えるんだよな?」

「あっ…うん。」

「なら、ちよっと来い!」

グイッ!

「?!…ちよッ!…。」

白兔は詩雅野の手を引っ張る。

「主。詩雅野様は病人ですが、よろしいのですか?」

「別に、いいだろう?うさぎにだって依頼なんだしな。」

「かしこまりました。」

「あっ…おい!」

白兔と白葉は詩雅野を連れて、窓から飛び降りる。

「さっさと、依頼終わらせて、うさぎは寝る。」

「そっでいびきますね。主。」

「……。」

なんだ…こいつら…。

「…。」

「静！一緒に帰ろう」「ニコッ

「おう。」

静の携帯がなった。

「はい？」

『静！まずい！』

「震？どうかしたのか？」

『詩雅野君がいなくなったの！』

「何?!…。」

『いいから、詩雅野君を探して！お願い！』

「了解！」

静は電話を切った。

「どうかしたの？」

「詩雅野がいなくなった！」

「えっ?!…私も探すよ！」

「おう！見つけたら、電話くれ！」

「うん！任せて！」ニコッ

静と麗は詩雅野を探した。

「…で、何するの？」

「この依頼者の未来を見てほしいのだが。」

「…。」

詩雅野の目の前には一人の少女が居た。

「何で?…。」

「今回の依頼は依頼者の未来を見てくれとの依頼だからな。」

「…しよつがない。」  
「詩雅野は少女に触れた。」

「好きだよ」「ニコッ」  
「俺も、これから一緒に居ような。」  
「うん!」「ニコッ」

「…。」  
「…。」  
「どうだ?」  
「告白されてた…。」  
「そうか。」  
「…。」  
「主。依頼は完了しました。帰りましょう。」  
「そうだな。よし帰るぞ!」  
「なっ?!…。」  
「白兔が詩雅野を担ぐ。」

さっきの未来…僕には無縁の未来だ…。

#### #4 同居・双子（後書き）

アドバイスなどがあれば、ください。  
お願いします！！

#5 同居・精霊使い（前書き）

今回は精霊使いの少女です。

## # 5 同居・精霊使い

タツ！

「うわあ！？」

ズツズツ！

「大丈夫か？詩雅野？」

「あっ…うん。」

詩雅野はとつても嫌な顔をする。

「うさぎは優しくしたぞ。」

「……。」

白兔は詩雅野を下ろす。

ガラツ！

「詩雅野！」

「…静さん！」

「お前等、勝手に詩雅野を連れまわすなよ。

連れまわすならメールか電話しろ！」

「はいはい。帰るぞ白葉。」

「はい。主。」

二人は去って行った。

「なんだったんだ？…。」

「詩雅野も、あんまりああいう奴についていくなよ！」

「…僕は子供じゃない！」

「詩雅野？…。」

「もういい。僕は先に部屋に戻るからな！」

「はいはい。」

詩雅野は部屋に戻った。

タツタツ

「血を吸う者の匂いがする…。」

ヴァンパイア

ドクンッ!

「!?!? ハア…ハア…ハア…ハア…。」

夜はいつも、詩雅野は起きる。

「ハア…ハア…夢…。」

いつも、一緒の夢…。

ガチャッ

誰かが、部屋に入ってきた。

「!?!?…。」

詩雅野は恐る恐る、静かに動く。

「空黄…。」

ガッ!!

「?!?!?…。」

詩雅野が壁に吹き飛ばされる。

「ガハッ!…。」

「居た…。」

「!?!?…。」

詩雅野の目の前には、一人の少女が立つ。

なぜだ…何も無いのに…。

「未来は見えないの?…。」

「!?!?…。」

「君の未来は全て、自分じゃない。他人だけの未来が見えるだけなんだよ…。」



「!??。」  
「応えて、ヴァンパイア。」  
「?!?!?。」

「追手!??まさか、こんな所まで来るのか?。」

「…………。」  
「ヴァンパイア?。」  
「パチッ！」

「部屋の電気がついた。」

「しーちゃん。」  
「闇香、何してんだよ。」  
「…はあ?。」

「二人は知り合いらしい。」

「こいつは、黒咲闇香。」  
「さつきはごめん…炎舞が勘違いで間違えた。」  
「何をだ?。」  
「生き残ったヴァンパイア。」  
「?!?!?。」  
「なんだ、それ?。」  
「闇香は立った。」

「また、明日。皆の前で話す。」  
「そうか?分かった。今日は寝ろよ。」  
「うん。お休みしーちゃん。」  
「お休み。」  
「そして、部屋のドアが閉まった。」  
「詩雅野?どうかしたか?。」  
「いや…別に。もう寝る。」

「おう。」

詩雅野は寝転ぶ。

僕は…狙われているのか？…。

## #6 同居・情報

朝の光が、詩雅野に差し込む。

「…ん？…朝か…。」

夢は見なかった…落ち着いていたのか？…。

「ふわあ…ん？」

詩雅野は食堂に行く。

アパートでも、食堂やら屋上やら何かいっぱいあるらしい。

「詩雅野君！おはようー！」「ニコッ

麗が詩雅野に微笑む。

「…おはよう。」「

「…昨日の少年だ。」「

「詩雅野か。おはよう。」「

「詩雅野君、おはよう。よく寝れた？」「

「……そんなに一気に言われても応えれない。」「

詩雅野は椅子に座りながら言う。

「で、昨日。俺の部屋で言ってた事は？」「

静が闇香を見る。

「…精霊から聞いた話だよ。」「

「お前の精霊は情報が早いな。」「

「大事な話になって思っ、皆呼んだよあゝ」「ニコッ

震は笑顔で言う。

「皆っ…はあ…。」

静は頭を抱える。

「詩雅野！…！」

「…うわあ？…！」

「!?!?。」

白兔が後ろから詩雅野に抱きつく。

「皆さん、ご無沙汰しております」「ニコッ

「あっ…うさうさとはくはく!」「

「そんな名前で呼ぶな!」「

闇香はなぜかテンションが高かった。

「まったく、いつ見てもうるさい連中ですね。」「

「閃は嫌い?」「

「苦手なだけですよ。」「

二人の少年少女が来た。

少女の名前は『蝶影菊蛸』ちよつかけきくほたる

少年の名前は『赤緑閃剣』あかみどりせんけん

「って、早く席についてね。」「ニコッ

雲が皆に指示する。

「と、それじゃ、席に着いた所で闇香ちゃん、説明お願い」「ニコッ

「…了解。」「

闇香は真ん中に座る。

「今、この世界中で、ヴァンパイアの生き残りを探してる。」「

「ヴァンパイア?そんなのいるのか?」「

白兔がお茶を飲みながら言う。

「最後まで聞いて、それから質問してよ。うさうさ。」「

「だから!うさうさじゃねえーよ!」「

「はいはい。」「

静がケンカを沈める。

「その、ヴァンパイアの生き残りを探して、見つけ出したら、報酬  
がもらえるらしい。」「

「!?!?。」

「報酬?…なんで?」「

「滅多にいないんだって、ヴァンパイア。しかも生き残りだから、一人らしいよ。」

「一人ですか…今も探してるんですか？」

「うん。殺し屋やマフィアとかはもう探し始めてる。」

「へえ…。」  
皆いろいろ考え始める。

「そのヴァンパイア、何回か、見つかって捕らえられたけど、脱出したって話よ。」

「ふ〜ん…やるな。」

「そんな、ヴァンパイアがいるなら僕は見て見たいですよ。」  
閃剣が言う。

「特徴とか無いわけ？」

「特徴？…えつとね…左目に傷跡が合って、首から背中にいれずみがあるらしいよ。」

「そんな奴、絶対あやしいだろう？」

白兔が言う。

「!?!?…。」

詩雅野は酷く動揺していた。

「詩雅野？」

ビクッ!

「?!?!?。」

「詩雅野? どうかしたのか？」

静が詩雅野を見る。

「…なんでもない…悪い、僕少し外の空気を吸ってくる。」

「あつ! 詩雅野!」

詩雅野は外に出て行った。

「どうしたんですか? あの人。」

「さあ…。」

「…。」

「ちよつと、俺行つて来る。」

「あつうさうさ！」

白兔が詩雅野を追った。

「ハア…ハア…ハア。」

パシッ！

「!?!?。」

誰かが詩雅野の手をつかんだ。

「ハア…詩雅野、どこまで行くんだよ。」

「…白兔…さん。」

「…さんは要らん。」

「…うん。」

「雨降つてるのに、風邪引くぞ。」

「…白兔こそ、引く。」

「別に、俺はバカだからな」ニコッ

「……。」

詩雅野は暗い顔をする。

「お前…何か隠してるのか？」

「えっ?…。」

## #7 同居・心配

雨は降り続けていた。

「……………」

詩雅野は白兔から目をそらす。

「詩雅野？」

「…いいからもう帰る。」

詩雅野は歩いていく。

「……………」

何を隠しているんだ？…あいつは？

『助けて』

「!?!?!?!」

白兔の耳には一瞬、誰かの声が聞こえていた。

「…白兔？」

「助けを求めている…。」

「えっ？」

「こっちか!」

「あっ!おい!」

白兔は、一直線に走っていく

詩雅野は白兔を追う。

「誰だ!うさぎを呼んでいるのは!」

『助けて…………』

「おい…白兔?」

白兔は叫んでいた。

「うさぎを呼んでいるんだ！」

「…？」

「あつ居た！」

『助けて…。』

白兎は箱を見つけて、走り出す。

「…猫？」

白兎は箱の中に入っている猫を抱き上げる。

「お前か？うさぎを呼んだのは？」

『うん。…見つけてくれて…ありがとう。』

「お前はうさぎが面倒みるからな。」

白兎は猫を服の中に入れて、帰る。

「詩雅野！帰るぞ！」

「あつ…おつ。」

詩雅野は道路を通行しようとする。

ニッ

「死ね。」

「?!…!。」

ドンッ!

詩雅野が誰かに押される。

「詩雅野！」

詩雅野の目の前には車が通ろうとする。

「?!…!。」

死ねるのか?…僕は…?。

詩雅野は目を静かにつぶる。

「詩雅野!!!」



『詩雅野！絶対、私より早く死んじゃ駄目だよ』ニッコツ

「…ごめん…約束守れない…。」

ガシャーンツ！！！！

「……。」

「たく、何してんだよ。」

「…?!」

白兔が詩雅野を助けた。

「大丈夫か？」

車から人が降りてくる。

「あっおう！大丈夫！心配しない！」

「そうかい！ならよかったよ！」

そして、おじさんは車に戻り、どこかに去って行った。

「大丈夫か？」

「…大丈夫…。」

「そうか」ニッコツ

「?!…。」

白兔が詩雅野の頭を撫でる。詩雅野は顔を赤く染まる。

「晴れてきたぞ。」

「……。」

「やっぱり、しぶといなあ〜詩雅野は。」

## # 8 同居・風邪

「……………」

「大丈夫か? ……」

「…そんなのに…見えるか? ……」

詩雅野が風邪で寝込んでいた。

原因は、この前の雨。

白兔は風邪を引かなくて、全部詩雅野が受けてしまった。

「ハア…ハア…。」

詩雅野は顔が赤い。

「大丈夫か?」

同居の静が面倒を見ていた。

「まあ、もう寝ろ。」

「…うん。」

詩雅野は静かに目をつぶって、眠った。

『詩雅野! 大丈夫? 私が看病してあげるね! 大丈夫。いつも一緒にいるよ』ニコッ

お前はあの後、どこに行ったんだ? ……」

覚えてない…記憶が大切な時の記憶が途切れている……」

分からない…その記憶の続きが分からない……」

ガラッ

「ん？白兔？」

「うさぎも見舞いに来た。ほれ。」

白兔は静に向日葵を渡す。

「よく、合ったな。」

「探すのに、苦労したぞ？」

「主は必死に探してました。」ニコッ

「そうか、サンキュ！」

「別に！！じゃあな！」

白兔と白葉はそのまま部屋を後にした。

ガラッ

「しーちゃん。」

「闇香。」

「お見舞いに来たよ。」

「ありがとな。」

「あの子、寝てるの？」

「寝てる。」

「そっか。はい。」

「ん？なんだこれ、絵？」

「そう、精霊と書いたんだ。はい。あげる。」

「ん、サンキュ。」

「じゃあ、バイバイ。」

闇香は静に絵を渡して、部屋を去った。

「。。。」

ガラッ

「静さん。」

「静。」

「菊蛭、閃剣。」

「あの人…。」  
「ん？」

「菊虫の影狼が、あの人を見て何か違和感を感じたそうです。」  
「違和感？」

「それを伝えに来ただけです。」

「だから…気をつけてね。」

「おう。ありがと」「ニコッ

「うん。じゃあ。」

「失礼します。」

二人は部屋から出て行った。

「詩雅野。お前、結構心配とかされてるんだな。  
友達も仲間も出きて、よかったな。」

静は寝ている詩雅野に話した。

ガラッ！

「麗と霏？」

「はい、これ。」

「果物？」

「私、忙しいからこれで！」

霏は果物を渡して、去った。

「…麗？」

「あつ…詩雅野君…大丈夫？」

「あつ…寝てるから、大丈夫だろう？」

「そっか…」「ニコッ

麗は優しく微笑む。

パチッ…。

「ん？…。」

詩雅野は目を覚ます。

「…二人で何してんの？…。」

詩雅野は二人を見る。

「別に…。」

「な…何もないよ!」ニッコ

「…別にいいけど…。」

詩雅野は再び眠った。

## #9 同居・脅迫

『お前の秘密を僕は知ってるよ?』

ハッ!

「!?!?」

詩雅野は驚いて目を覚ます。

「ハア…ハア…ハア…」

詩雅野はとても暗い顔をしている。

誰だ?…僕の秘密を知ってる?…ヴァンパイアの生き残りの事?…。

「!?!?」

知られたくない…知られるのが…。

ガチャツ

詩雅野はフラフラになりながら廊下を歩く。

静はまだ寝ていた。

「ハア…ハア…」

詩雅野は外に出て行く。

誰なんだ…誰…。

ドクンッ!

「!?!?」

詩雅野の目が変化し始める。

なぜだ…ヴァンパイアが疼いている…。

詩雅野はしゃがみこむ。

目を手で押さえる。

「ハア…ハア。」

タツ

「お前の秘密を僕は知っている。」

「!?!?。」

詩雅野の目の前には誰かが立っていた。

「誰…だ?」

「僕は…アルカナメンバー?。風。」

「…アルカナ?。」

詩雅野はフラフラしながら、立ち上がる。

「僕は、お前を迎えに来た。」

「…僕を?。」

「そう。メンバー1《メイロ》に頼まれて。」

「メイロ?。」

「僕とくれば、秘密を誰にも教えない。」

「だけど、来ないのならば、お前の仲間を一人ずつ殺す!」

「!?!?。」

風は不気味に微笑む。

「僕は…。」

「お前には自由は無い。」

「!?!?。」

「お前の命も運命も僕達、アルカナが握ってるからね」ニッコソク  
そのまま風は消えた。



「……………」

詩雅野は手を下ろした。

「……………」

そしてマフラーを握る。

僕の秘密…仲間が死ぬ…。

「僕は…どうしたらいい？…分からない…。」  
詩雅野は道端でしゃがみこむ。

シュツ！

「…ヴェンパイアの匂い。」

「うわぁ！！早いね！！」

「能天気だな。」

森には二人の男女が近づき始めている。

# 10 同居・恐怖

「お前の秘密を僕は知ってるよ？」

あいつの言葉が…頭から離れない…。

何で僕の事を知ってるの？…。

「おい！詩雅野！」

ハッ！

「！？…。」

詩雅野の目の前には心配そうな顔をする、静が居た。

「静…さん。」

「大丈夫か？顔色が悪いぞ？」

「大丈夫…。」

「そうか？それならいいが。」

「ほら、詩雅野。」

「白兔…。」

白兔が詩雅野の紅茶を渡す。

「ありがとう…。」

「おう。」

白兔が床に座る。

「主、椅子に座っては？」

「あつ…ここがいい。」

「かしこまりました。」

白葉は白兔の隣に座る。

「…。」

『君の事はあるらより、僕の方が知ってるよ？』

僕は…何を焦っている…。  
ヴァンパイアとしられても…僕が出て行けばいい…死ねばいい。  
ただそれだけの事なのに…。

「詩雅野?…。」

『君はヴァンパイア族、人間とは一緒には入れない。』

違う！僕は…、一緒に居たいと望んでない！

「!?!?…。」

「麗?」

麗の表情が変わった。

「どうかしたのか?…。」

「…あつ…詩雅野君。」

「…。」

詩雅野は顔をあげて、麗を見る。

「何をそんなに…おびえているの?」

「!?!?…。」

怯えてる?…僕が?…。

「詩雅野が怯えてる?麗、お前バカだろう?」

「もう!!!本当だもん!!!」

「……………」

「!?!?。」

急に詩雅野が立って、皆驚く。

「…悪い、もう部屋に戻る。気分が悪いから…じゃあ。」

「あつ！詩雅野！」

詩雅野は急いで部屋に戻った。

「ハア…ハア…ハア…。」

「ねえ、君は何でそんなに怯えてるの？」

詩雅野の目の前には今日の朝合った、男が現れた。

「詩雅野はヴァンパイア、だから僕と行こう。」

「……………いけない。」

「なぜ？」

僕はやっぱり…。

「僕は…いけない。」

あいつら…。

「僕の居場所は…ここ。」

自分の正体を…。

「そっか、だけど君は後悔するよ？」

「えっ?…。」

知られるのが…。

「だけど、また気が付いたときに会おうね、詩雅野」「ニコッ

そして、消えた。

怖い…。

軽蔑される、怖がられる…そんな事しか頭に浮かばなかった。

# 11 秘密・狙い

詩雅野はいつか死んでしまうの？私をおいて、一人で？…。

あんたはいつも、そんな事を考えていたのか？…。

僕は死なない…死ねない…。

「詩雅野！」

ハッ！

「?!…静!?!…」

静の声で詩雅野が目覚めます。

「大丈夫か？うなされてたから、起したけど。」

「…あつ…そう。」

詩雅野は結構顔色が悪かった。

「…。」

「!?!…」

静は詩雅野の目をじっと見る。

「…何？」

詩雅野は頬を赤くする。

「詩雅野？顔が赤いぞ？どうかしたのか？」

「別に!?!…」

静は…鈍感か…!?!…。

「詩雅野君！静！おはよおー!!」「ニコッ

「!?!…」

麗が部屋に入って来た。それと同時に詩雅野は顔色を変えた。

「詩雅野？」

「…僕、外の空気吸ってくるから…。」

詩雅野は部屋から去って行った。

「…やっぱり、あの言葉が詩雅野君を苦しめたのかな?…。」

「大丈夫だろう?いつかは、自分の能力を打ち明けたらいいだろう?」

「そうだね。静は優しいね、ありがと。元気出てきたよ」ニッコシ

「そっか。ならよかったな。」ニッコシ

静は麗の頭を優しく撫でる。

タッタッ

「ねえ、閃!何してるの?」

「菊蛭。別に何もしてませんけど…。」

「そうなの?じゃあ、私と遊ぼう!」ニッコシ

「…しょうがありませんね。でわ行きますよ。」

「うん!」

閃剣は頬を赤くして、菊蛭と手を繋いでどこかに去った。

詩雅野は一人で外に居た。

怖い…軽蔑…どんな顔をする?…。

「…僕はどうすればいいんだろう?」

詩雅野は座り込む。

「自分の思うようにすればいいんじゃないか?」

「!?!?…白兔!…白葉さん…。」

詩雅野の目の前には白兔と白葉がやってきた。

「白葉で構いません。」

「そっ…分かった。」

「で、何に悩んでるんだ?」

「…分からない。」

「はぁ？分からないのに、悩んでるのか!？」

「…あつうん…。」

詩雅野は空を見上げる。

白兔と白葉は詩雅野の近くに座る。

「なあ…例えばの話だけど…。」

「ん？」

「僕がもしも、人間じゃなかったらどうする?。」

「!?!?。」

詩雅野は白兔の顔をした。

白兔はとても、驚いていた。

「…あつ…例えばの話だつて…。」

「…うさぎは多分…軽蔑と罪悪感と憎しみと恨みでお前を殺すかも知れない。」

「!?!?。」

「そうですね。主が望むならそれは、病む終えません。」

「…………。」

詩雅野の周りが真っ暗になった。

『君が望んでない事を言うんだよ？人間って言う生き物は!』

「…僕は…。」

『軽蔑、罪悪、憎しみ、恨み、悲しみ、絶望、それで人間はお前を殺す!』

「やめる…。」

『さあ、殺せ。お前の思うままに。』

「やめて…くれ…。」

『お前が殺せばいい。お前が逆に憎めばいい。』

「違う…やめる…。」

『人間を仲間を血に染める!』



「やめろおおおおおおおおお！……！！！」

「詩雅野！！！」

ハッ！

「！？…白兔？…。」

「大丈夫か？急に大声出して？」

「…僕は…？…！！。」

詩雅野は何か本能する。

「よける！」

「はア！？」

「！？…危ない！！！」

ドンッ！！

空から、大きな何かが降って来た。

そして、詩雅野は白兔と白葉を押して。

そのまま、大きな物の下敷きになった。

「詩雅野！！！！」

## # 12 秘密・正体

「詩雅野!!」

白兔は叫ぶ。

詩雅野は下敷きになった。

「詩雅野!!」

「主。」

「手伝え!!」

白兔と白葉は下敷きになった詩雅野を助けるため、  
上のものをどける。

「はははは、人間は所詮そんな物か。」

「はあ?!!」

「主!!」

「うるさいよ。」

ドンッ!!

「白葉!!」

「!?!ガハッ!!」

一人の男に白葉は壁まで吹き飛ばされて、気を失ってしまふ。

「お前は...」

「君は、誰を待ってる?」

「!?!」

男は白兔の顔に触れる。

カキンッ!!

「?!?!詩雅野!!」

「…チツ！」

詩雅野は大きな剣を男に振るが男は剣でそれを受ける。

「詩雅野、酷いね。そんなに僕に会いたくなかった？」

「僕の心はそんな事で崩れない！」

「それは残念だねえ」ニッコツ

「うっせっ！！！」

「詩雅野！！！」

詩雅野は男と戦っていた。

「詩雅野！！！」

「白葉を連れて逃げろ！！！」

「！？…。」

詩雅野は必死だった。

「白葉！大丈夫か？」

「…主…私は…。」

「逃げるぞ！！！」

白兔は、白葉を抱えて、逃げる。

「人間を助けるんだね。」

「…あんたには関係ねえー！！！」

「そう、怖い顔しないで」ニッコツ

「…僕はあんたを殺す。」

「本当に…。」

詩雅野の傷が治っていく。

「君みたいなヴァンパイアは初めてだね。」

「…。」

詩雅野は男の目の前から消える。

「詩雅野、遅いよ。」

カキンッ！！

「!?!?。」

パシッ!

「?!?!? あっ……。」

男は詩雅野の剣をつかんで、そのまま詩雅野を壁まで投げる。

「!?!? ……グッ……!!」

詩雅野は立ち上がるうとする。

ダンッ!!

「!?!? ……。」

男は詩雅野の横に剣を刺す。

「君はヴァンパイア。人間とは関わっちゃ駄目だよ?」

「……。」

男は詩雅野の顔を上げる。

「あんたに……僕の何がわかる? ……。」

「本当に、ウザイヴァンパイアだな!!」

ガッ!

「!?!? ……グッ……!!」

詩雅野は蹴られる。

「君は僕のいう事を聞いていればいい。

所詮、ヴァンパイアの生き残りなんだからね?」ニヤッ

「ハア……ハア……。」

「さっきの異性はどうしました!?!?」

グサッ!!

「!?!? ……うわぁ!! ……。」

「痛いですよね?」

「クッ……。」

詩雅野は方を剣で刺された。

「詩雅野!! ……!!」

「……?!?!? ……!! ……。」

詩雅野の目の前には、アパートの皆が来た。

「人間ですか。本当に、ウザイですねえ」

「詩雅野！大丈夫か？」

「…来るな…逃げろ…」

「何言つてんだよ！助けに着たんだぞ！！」

「なら、いい事を教えてあげましょう？」

「！？…やめろ…」

男は微笑んだ。

「やめろ！」

「詩雅野？」

詩雅野はとても恐怖を抱いていた。

知られるのが…怖い。

「白夜詩雅野君は、ヴァンパイアの生き残りですよ？」

「！？…」

「……」

### # 13 秘密・契約

「えっ…詩雅野がヴァンパイアの生き残り!？」

「そうだよ？ねえ、殺したら？お金がほしいんでしょう？」

本人の前でよく、殺すとかなんやら言えたね？」ニッコツ

「!?!?。」

「…クツ…。」

カキンツ!!!

「詩雅野!?!？」

詩雅野の体から血がポタポタたれているが、詩雅野は剣を振った。

「君も少し鬱陶しいですね。」

ドンツ!!!

「!?!?。」

「詩雅野!？」

「やっぱり、君。」

「……。」

「そいつらといたら、ヴァンパイア的能力も特殊な能力も反応しないだね。」ニッコツ

「!?!?。」

「詩雅野!？」

「!?!?…グツ…ゲホツ!!!」

「詩雅野!？」

詩雅野は大量の血を吐く。

「来るな!？」

「!?!?。」

静は動きを止める。

「…僕はヴァンパイア…もうあんたらと住む世界が違う…。」

「!?!?。」

これでよかった。僕はもう…一人で大丈夫…。

「詩雅野、まだ戦うの？」

「…。」

カキンッ！カキッ！ドンッ！ダンッ！…！

「…チッ…。」

「ははははは、動きが遅いね。詩雅野」「ニコッ

「…クッ！…！失せる…！！！」

バキッバキッ！！

詩雅野の剣が地面にヒビが割れる。

「ハア…ハア…。」

「詩雅野…！！！」

「僕…は…。」

バタンッ

「！？…。」

詩雅野が倒れそうになるが、静が後ろから受け止めた。

「…静…。」

「ヴァンパイアだからって、俺から逃げるな！」

「！？…。」

「逃げんな…俺から。俺を信じろ…！」

「！？…。」

ドクンッ！！

「！？…。」

これって…もしかして。

詩雅野と静の周りに髑髏型の陣が出てきた。

そして、下から鎖が出てきて、詩雅野と静を拘束する。

「なっ！なんだこれ？」

「…マジ…？。」

「はあ？」

「…僕の契約者が静！？」

「はあ！？」

ドクンッ！！

「！？…なんだ？…急に体が…重ッ！…。」

「契約するか？」

「はあ！？」

詩雅野は目の前に来る。

「そしたら、お前は俺から離れないのか？」

「離れないしずっと一緒だと思え！！」

「分かった。」

「…生意気な…静だな。」

「いつもの事だ。」

そして、詩雅野は静の首から血を吸った。

ドクンッ！

「?!…。…なんだ？…これ？」

「…静の血を吸ったと同時に僕の血を静の体に入れた。」

「そうか…でも。」

グイッ！！



静が詩雅野の手を引つ張る。

「だが…お前が俺のそばにいてくれるなら、これくらい構わないからな。」

「!?!?。」

静は詩雅野の肩に頭を乗せてつぶやく。

「……分かったよ!?!」

「くくく、契約をしたか。やっと楽しめそうだね。」

## #14 秘密・サンタ

「う。。。」

僕は、ヴァンパイアと知られ、そして静と契約をしてしまった。  
どうしたらいいんだ？こう言う状況は！！！！！！

「キヤアアアアア！！！！」

ドンツ！！！！

「！？。。。」

詩雅野の目の前から少女が降って来た。

「。。。。。」

「いたたたたたた。」

少女は立ち上がる。

「あのツ！どこも当たってませんよね？怪我とかしてないですか！  
」？

「。。いや。。してない。。。」

何。。この、人間。。サンタか？。。。

ドンツッ！

「！？。。。」

詩雅野は急にぞっとする、寒気がした。

なんだ！今の。。まるで狼族が僕を見てるかのようだ。。。

「あつ。。私は、冬桜雪乃！よろしくね」「ニッコッ

。。僕は、白夜詩雅野。。。」

「意外！！！！」

「！？。。。」

いきなり、雪乃が詩雅野に顔を近づけてくる。

「意外です！！」

「な…何が？。。。」

詩雅野は頬を赤く染める。

グイッ！

「！？…静！」

「何してんだか。」

静は詩雅野の腕を引っ張る。

「…あっお連れ様でしたか。今度は手放してはしないでくださいね」  
ニコッ

「えっ？。。。」

「あと、詩雅野君！あなたは”僕”と言うより”俺”の方が一人称が似合いますよ！！」

「なっ！？…余計なお世話だ！」

「えへ！」ニコッ

雪乃はどこかに走って消えてしまった。

「静？。。。」

「何か、ヤッパリ体が変な感じだな。」

「…ヴァンパイアの血は少しきついからな。

全て、なれ。」

「へいへい。」

「で、何買ってきたんだ？」

「ほれ。」

パシッ

静は詩雅野にジュースを投げる。

「喉渴いたろうっ？」

「…まあ。」

詩雅野はジュースを飲む。

「…さっきのは…なんだ？」ボソッ

僕を感じた。狼族の視線。

人間と思えない人間…。

「もう！！分からん！！…んぐっ！！」

「はいはい。今は、落ち着け。」

静が詩雅野の口にデカイ飴玉を入れた。

「…静のバカ。」

「はいはい。」

「さっきのどうだったんだ？」

「うう〜ん…契約してるかも、そんな感じがするなあ〜」「ニッコッ

「なんで、いつもそんな勘で…。」

「銀狼は酷いねえ〜」

「うっせ。さっさと行くぞ。」

「ねえ！」

「ん？」

「ヴァンパイアって狼嫌いななの？」

「点滴って所だ。」

「そっか…。」

「なんだ？」

「いや！」

一人のヴァンパイアと…。

「静…僕と契約してよかったの？」

ヴァンパイアと契約した人間…。

「ああ…俺はお前がそばに居てくれたらそれでいい。」

そして…。

「銀狼、戦うの？」

一人のサンタクロースの少女と…。

「当たり前だ！ヴァンパイアは殺す。それだけの事だ！」

一人の裏切り狼族の少年…。

# 15 秘密・点滴

「血が…血…ほしい…。」

ハッ！！

「！？…う！」

ズキッ！

詩雅野は頭を抱える。

一瞬間に激痛が走った。

「…はあ…。」

詩雅野は寝転ぶ。

「…狼…あゝあゝ…！！…もう分からん…！！…！！…！！…！！…」

詩雅野は大声を出した。

パシッ！

「！？…。」

「大丈夫か？」

「静！？」

静が隣から詩雅野の手をつかんで、心配そうな顔をする。

「あつ…おつ。」

「そつか？」

「！？…。」

静が詩雅野のおでこを触る。

詩雅野は顔を真っ赤にする。

「詩雅野？顔が赤いが、大丈夫か？」

「…だ、大丈夫だ！！」

「ふうん…。」

詩雅野は静の部屋から出た後に顔を隠した。

何…赤くなってるんだよ…僕は…。

ガシャンッ！

「！？…。」

ドクンッ！

詩雅野の部屋の窓ガラスが割れた。

「…ヴァンパイアの生き残り。」

ドクンッ！

「！？…。」

「あれ？詩雅野は？」

「なんだよ、偉くあいつになつていてるな。」

「うさぎのお気に入りだからな！」

「はいはい、で詩雅野君は？」

「囊…部屋に居るんじゃないか？」

「何で知らないのよ。」

「いや…見てくる。」

「うん。」

静は部屋に戻る。

「！？…。」

静は自分の部屋を見て。

割れたガラスは部屋中に飛び散っていて、詩雅野のベッドはびりびりだった。

「!?!?。」

そして、詩雅野のベッドに血がついていた。

「詩雅野!」

「静?」

静は急いで、外に出て行った。

「ハア…ハア…。」

「ヴァンパイアは殺す。それが狼族の運命。」

「…お前は…違う。」

「はあ?」

「お前は…血が違う。」

「!?!?。」

詩雅野の瞳は真っ赤になって、髪は漆黒の髪に変化した。  
そして、背中には黒い羽があるように見える。

「お前は、裏切りの狼族。」

「!?!?…チツ!」

カキンツ!!

「僕に勝てると思うなよ?」

「ヴァンパイアだからなんだ?」

カキンツ!

「貴様は、自分の未来が見えないんだらう?」

「!?!?…お前に関係などない!!」

グサツ!!

「!?!?。」

「お前の動きは全て遅い。」

カランツ

詩雅野は肩を刺された。



「ヴァンパイアでも、治るのは早い。だがさっさと殺せば話は早い。」

「……………」

「契約をすれば、力半分は失うのだろうか？」

「?!…チツ…。」

詩雅野は刺された右手は使わないで、左手で剣を拾う。

「ハア…ハア…、それがどうした？僕は死んでも構わない存在だ！」

「はっ！それなら、殺してやるよ！…！」

「…チツ…。」

『詩雅野…好きだよ』ニッコツ

「!?!?…。」

詩雅野の動きが急に止まった。

そして、瞳の色が黒と赤が混ざった色に変わった。

## # 16 秘密・何者？

お前はいつも僕の隣に居たのか？

僕は、お前といた時間がいまいにしかない。

だから、分からない。

お前の名前もお前が何者なのかも、お前が僕にとってどんな存在なのかも…。

分からないんだ。

ドクンッ！

「……。」

「これが、ヴァンパイアの力？ますます変化したな。」  
詩雅野の傷は一瞬にして、治って行った。

「……。」

「…チッ！」

詩雅野は間違いなく、別人のように見える。

「…さつきと殺気が違う。」

狼族の少年は冷や汗をたらず。

「俺を、真剣<sup>マジ</sup>で殺したいんだな。」

「…ククッ！当たり前だ！俺は、ヴァンパイアの王になる男だ！！  
！たとえ詩雅野が死にたくても！

この俺は死なせない！！！！！！！！」  
カキンッ！！

「!?!」

人格が変わったか?..

詩雅野はまったくの別人になっていた。

「あつそうだ。俺の名前は、詩雅野じゃねえー、びやくせれん白夜詩恋。

詩雅野の弟。まあ、死んでるけど、詩雅野の中に入ったから大丈夫だあー」ニヤツ

「チツ…俺は狼族の銀狼だ!」

「なら、死ね!!俺は詩雅野みたいに、甘くないぜ!!!」

カキンツ!カキンツ!!!

「グツ!」

「ああ!もう疲れたのか?ダッセー!なら死ね!!!」

グサツ!

「!?!」

詩恋は銀狼の肩を刺した。

「グツ…」

ペロツ

詩恋は、剣についた血を舐めた。

「…人間は鈍い。裏では俺等がこんなに戦っているのに、なぜ気づかない?..」

本当に…人間は鬱陶しい!!!!!!」

「!?!」

「やめて!?!」

「!?!」

銀狼をかばったのは、サンタの格好した少女だった。

「雪乃!?出てくるな!危ないぞ!」

「…銀狼を殺さないでほしいの…お願いします!」

「…チツ…俺は女、子供に手は出さん、今日は女に免じて許してやる。」

「!?!?…ありがとう!」「ニッコ

「詩雅野!!」

静が到着した。

「チツ!…雪乃、行くぞ!」

「…あつ!銀狼!!」

銀狼と雪乃は消えた。

「詩雅野!大丈夫か?」

静は詩雅野を見て、驚くが頭を撫でる。

バシッ!

「!?!?…詩雅野。」

「これが、詩雅野の契約者が。あいつも信じられねえー、人間と契約するなんてな!

俺は認めない!俺に兄貴を奪った、お前を!」

「!?!?…お前は何者だ!」

「俺か?俺は、白夜詩恋!詩雅野の二つ目の人格で、詩雅野の弟だ

!」

「なっ!?!?…。」

#16 秘密・何者？（後書き）

何か、本当に二重人格のキャラふえてるなあ〜∴ W W  
まあ、好きだからいいではないかあ〜 W W

詩恋「はあ！？俺が出てきちゃ駄目だったのか！

ふざけんな！兄貴だけにいい格好させられるか！！！」

ッ

怒

# 17 秘密・弟

「弟!？」

「そうだ。俺は詩雅野の弟だが？」

「!?!?。」

性格が違う過ぎるだろう!?!?。

「チツ…人間が鬱陶しい。契約者か?それでも。」

「…俺は、詩雅野と一緒にいる。それだけだ。」

「ハッ!甘っちょろい。」

グイッ!

「!?!?。」

詩恋は静の襟首をつかむ。

「いいか!」

「!?!?。」

「契約者はな、そんなに甘い物じゃない!

契約をすれば、自由も何も無い!残ってるのは死だ!」

「俺は、詩雅野が居ればそれでいい。」

「兄貴はお前の事を助けるつもりだぞ?」

「えっ!?!?。」

「兄貴は、この俺を呼ぶ出してまで、お前を助けたかったんだろうな。」

「何を?!?。」

静かにはまったく理解していない。

「ヴァンパイアは、契約すれば契約者の血を欲する。」

「!?!?。」

「詩雅野は血を欲すると暴走する。意識がなくなるくらいにな。」  
「えっ?…。」

「だから…何回も契約してるけど…。そして、結果。」

「どうなったんだ?」

「契約者を殺した。」

「!?!?…」

「まあ、詩雅野にはその記憶が知らない。

まあ、殺した記憶も無けりゃ、契約した記憶もなくなってる。」

「!?!?…」

静は驚愕して、地面に座り込む。

「…契約を破棄するか?」

「…いや!俺は、詩雅野を信じる!」

「そうか、まあ、俺も手伝ってやるよ!」

「えっ?…。」

「危なかったら、助けてやる。じゃあな」ニッコッ

「!?!?…おう。」

バタンツ!

「詩雅野!?!?」

詩雅野は眠っていた。

本当に…ヴァンパイアの生き残りなんだな…。

# 18 秘密・似た二人

”死にたい”…。

”死にたい”…。

ただ、その言葉だけが俺の心を癒してくれた。

「……………」

人間界に居ても、面白く。

人間が人間を殺して、いじめて何がいい？

意味が分からなかった。

俺には、とても意味が分からない。

「……………」

俺の探しているのは、俺に似た人。

その人なら俺を信じてくれる。

俺の事を分かってくれてるって思ったから…。

「……………」

俺はいつものように、歩いていた。

ただ、人間の中をずっと静かに歩いていた。



「静…別にそんなに買わなくてもいいだろう!？」

「駄目だ。お前は結構食べるだろう?」

「駄目ないし!勘違いすんな!！」

ドクンツ!

「!?!?。」

俺と似てる…。

パシッ!

「!?!?。」

俺はつい、その人の手をつかんでしまった。

「あつ…。」

「……。」

「えっと…。」

俺は、意外と口下手だ。人と喋ったのもこれが初めてだった。

「僕は、白夜詩雅野。どうかしたの?」

「!?!?…あつえつと…。」

この人は俺を似ている…。

だけど…少し違った。

「詩雅野、まだか?」

「…あつ…ちよつと待てよ!！」

「……俺は…時雨朔夜!」

「…おう、朔夜!」「ニコッ

ドキッ!

「!?!?。」  
朔夜は頬を赤くする。

「じゃあな。」

「あつ…。」

「ほれ。」

「!?!?。」

詩雅野は朔夜に紙を渡した。

「僕の家!じゃあな!朔夜!」ニッコッ

「!?!? あつうん!」

嬉しかった。

だけど俺は…。人間じゃない。

”死神”の一族だった。

この世界には…。  
いろいろな一族がある

「…友達になってくれるかな?…詩雅野は…。」

「…チッ。」

「なんだよ……その舌打ち！」

「うるさい。神夜うるさい。」

「なんだと！閻香！俺は。不良だぞ……！！！」

「うるさい。」

「ムカツク……俺は神夜だぞ……！！！」

「……うっせつて言ってるだろうが……！声がでけんだよ……！！！」

閻香は性格が変わった。

「……チツ。」

「……。」

こんな、幼馴染の二人と一人の少年の出会いが始まるのであった。

# 19 秘密・夜死神

俺は、昼は人間と変わらない、姿。夜は死神の姿に普通に変わる。

時雨朔夜、死神で口下手でなぜか昨日、俺によく似た男の人？に話かけてしまった…。

「詩雅野…会えるかな？…。」

ドンッ！

「キヤア！」

「!?!?…。」

朔夜が誰かとぶつかった。

「いたたた、あつ！大丈夫？」

「!?!?…あつ…うん。」

ぶつかったのは、麗だった。

「そっか。じゃあ、私急いだからこれで」ニッコ

「…あつ…うん。」

「じゃあね！」ニッコ

麗はそのまま去った。

変な女。<sup>にんげん</sup>あんな奴も居るんだな、こんなちっぽけな世界に。

「……………」

「詩雅野！ほら、買出し行くぞ！」

「寝かせるよ…もう、夜だぞ？」

「いいから行くぞ！」

グイッ！

「あっおい！」

静が無理矢理、詩雅野の手を引っ張って買出しに出かける。

「寒ッ！」

「ほら。」

「!?!?。」

静は自分が着ていた上着を詩雅野にさせる。

「……ありがと。」

「どういたしまして。」

「……。」

詩雅野は頬を赤めていた。

はぁ…最悪だ。

シュッ！

「!?!?…静！よける！」

「!?!?。」

ドンッ!!

「痛ッ…。」

「大丈夫か？」

詩雅野は静を助ける。

「…ヴァンパイアか？貴様。」

「なんだ？死神か？」

「……俺はお前を殺しに来た。」

「何？チッ…。」

「詩雅野?!?!?。」

「ごめん。」

詩雅野が静の血を吸う。

「気をつけるよ。」

「おう！」ニッコツ

そして、詩雅野もヴァンパイアに変化した。

「さっさと済ませる！」

弟の人格が出てきた。

「手加減はしない。」

「誰も手加減をしるとは言ってるねえーよ！……！」

カキンツ！ダンツ！ドンツ！！

「！？……。」

早すぎて、まったく二人の動きが見えない。

「死神！誰に頼まれて俺を殺そうとしている！」

「…これは俺、個人の任務だ！」

「はあ？」

「俺は、お前を許さない！人間と契約など憎い行動だ！」

「チツ。。。」

カキンツ！！！！

「お前もうつぜな！！！！」

「うるさい！！！！！！」

ドクンツ！

「！？…ゲホツ！」

「ああ？なんだ？」

死神の少年が血を吐いた。

「チツ。。。」

「あつ！待て！」

死神の少年が消えた。

「チツ…。」

スーッ

詩雅野が元の姿に戻る。

「…静、大丈夫か？」

「ああ？…おう。」

「そうか…はあ…。」

「なんだか。」

「ゲホッ！ゲホッ！」

死神の少年も死神の力が解けた。

そして、少年は朔夜となった。

「…絶対殺してやる…ヴァンパイア…ゲホッ！」

## #20 秘密・再び

朝から雨が降っていた。

そして、一人の少年は椅子に座っていた。

「……………」

朔夜はただ座っていた。

雨にうたれていた。

「Vampire……………」

朔夜はつぶやいた。

俺は何をしてる?……………」

なぜだ……………」なんで、吸血鬼あいつと……………」詩雅野を比べるんだ?

違う! 違う! あの人は吸血鬼なはずがない!

俺は……………」信じたくない。

「風邪引くぞ?」

「!……………」

「大丈夫か?」

「詩雅野?……………」



「久々だな、朔夜」ニコッ  
朔夜の上には詩雅野が持っている傘がある。

「…う。」

「朔夜？」

「グッ…。」

俺は…なんで、こんなにも臆病なのだろう?…。

吸血鬼がこの人のわけないのに…。

何で?…何で?…。

「朔夜？」

「…う。」

ドンッ！バサッ

「!?!?…。」

『ちょっと、買い物行って来る、詩雅野。』

「って、俺も誘えよ！詩雅野！」

「うさぎも行くぞ！白葉！」

「了解です!！」

静と白兔と白葉は置手紙を見て、外に走って行った。

「あっ！居た！」

「詩雅……。」

「朔夜？……。」

「う……う……グズッ。」

白兔と静と白葉が見たのは、詩雅野に抱きついている朔夜だった。

「……大丈夫。僕がいる。僕は朔夜の見方だ。」ニコッ

優しく朔夜の頭を撫でる。

「う……詩雅野！ううわああああん！！！」

「はいはい。」ニコッ

雨が降る中、死神と吸血鬼は深い絆を結んだのだった。

#20 秘密・再び（後書き）

Vampireの意味は「吸血鬼」です！

## # 2 1 死神・友達

「はあ…。」

「…ああああ。」

「どうしたの？」

雲が白葉に聞く。

「詩雅野さんがこの間会った人に抱きつかれてショックを受けています。」

「そうなの。嫉妬か？」

「嫉妬だよ！」

ガチャツ

「噂をすれば。」

部屋には、朔夜と詩雅野が入ってきた。

「ビショビショだよ！詩雅野君！」

「!?!?。」

「闇香？」

闇香はなぜか詩雅野を心配する。

「はい、タオル」ニコツ

「あつ…どうも。」

詩雅野は闇香からタオルを貰う。

「朔夜。お前から拭かないと風邪を引く。」

「あつ…えっ?…うわぁ！」

詩雅野が朔夜の頭を拭く。

「なっ!?!？」

「ああ!?!？」

静と白兔のショックはまた一段さがった。

「よし、朔夜。服着替えに行くか！」ニコツ

「あつ…うん。」

二人は部屋に行った。

「結構、お似合いじゃない？」

「おい！闇香！何、俺に許可なく勝手に…。」

「うるさい。」

神夜と闇香はいつも喧嘩をする幼馴染。

「…詩雅野はマフラー取らないの？」

「…あつちよつとな。」

「濡れてるのに？」

「うん…洗濯しないと…後でするし。」ニッコ

「そっか…。」

詩雅野は苦笑いをした。

「詩雅野。」

「ん？」

「…あ…ありがとう…。」

「！?…。」

朔夜は顔を真っ赤にして言う。

「いいよ。」

「……。」

死神と人間はつりあうじゃんか…。

「先に行つててくれ。」

「ちよつと、俺詩雅野達見てくる。」

静は部屋に向かう。

朔夜は部屋から出て行つた。

「詩雅野は？」

「まだ、いる…けど。」

「ありがとな」「ニコッ

「…別に。」

朔夜はそのまま階段を下りた。

ガチャッ

部屋の扉を開ける。

「詩雅野？」

「…はあ…死にたい。」

「!?!?。」

静はこそつとのぞいていた。

詩雅野がマフラーを外していた。

「…。。。」

「!?!?。」

詩雅野の首には傷跡と思われる傷が数多く残っていた。

詩雅野?…

そして、詩雅野は首に包帯を巻いて、部屋を出て行った。

静は隠れていた。

ズルッ

詩雅野が出た後、驚きすぎて座り込む静。

「詩雅野…お前は一体…。」

何者なんだ？…。

## #22 死神・契約者

吸血鬼を強くするのは、契約者。

契約者を殺せばいい。

そしたら、吸血鬼は死ぬ。

それで行けばいい。

お前が望むままに。

「銀狼。町に行かなくてもいいの?」

「別に、構わないだろう??」

「そっか」ニコッ

銀狼と雪乃は森に奥に住んでいた。

なぜだ。何でこんな胸騒ぎがする??…。

「銀狼?」

「ちょっと、出かけるぞ。」

「あっうん。」

確かめに行くのが、いいだろうな。



そして一方。

「悪い、詩雅野。ちょっと出かけてくる！いつ帰ってくるかは分からん。」

「分かった…早く帰って来いよな。」

「はいはい。」

静はどこかに出かけてしまった。

吸血鬼の事を調べるか…。

「…ふわあ…。」

「詩雅野、部屋で寝たらどうだ？」

「大丈夫…。」

「そうか。」

「……。」

白兔は詩雅野を心配していたが、白葉と共に部屋に戻った。

ロビーには、詩雅野一人居た。

ソファーにポーツと座っていた。

「……。」

ドサッ

そして、とうとう、詩雅野は眠ってしまった。

「ZZZZZ。」

「…調べるのに夢中で夜遅くなってしまった！」  
静は急いで帰っていた。

タンツ

「!?!?。」

静の目の前には死神の少年が空から降りてくる。

「…殺す。」

「!?!? チツ。」

「死ぬ。」

シュンツ!!

死神が鎌を振ると、黒い闇の狼が静に襲い掛かる。

「!?!?。」

シュツ!

「!?!?。」

「世話が焼けるな。」

「お前!?!?。」

静は一瞬にして消えた。

「チツ…。」

死神も姿を消した。

「久しぶりです! 静さん!」

「雪乃!?!?…。」

「で、なぜ。死神なんか目をつけられてる?」

「俺が知るか。」

「それもそうか。家に帰るぞ。」

「おう。」

静と銀狼と雪乃はマンションに向かう。

タンツ

「何！？…。」

「…ここから、先は行かせない！」

「チツ…お前らは行け。俺が倒す！」

「銀狼！」

「大丈夫だ。俺は死なない。」

「うん！絶対帰ってきてよ！」

「知ってるよ。」

「負けないで！」

雪乃と静はマンションの中に入る。

「まあ、吸血鬼が起きるまで、俺が相手するか。」

「…雑魚が。」

「…血…がほしい…。」

### # 23 死神・狼

「チツ…俺の苦手な、死神。」

「狼は死神に弱いもんな！クハハハハハッ！！」

「…だが、俺は死神って言う響きが大嫌いだ！」

銀狼は背中から刀を出す。

「へえ、狼でも武器使うんだな。」

「…チツ。うっぜ。」

カキンッ！！

死神少年は鎌を軽々しく振る。

銀狼はそれをよける。

「飽きた。」

ジャリッ！

「！？…。」

「捕まえた。」

銀狼の足に鎌の鎖が巻きつく。

「痛めつけて殺してやる。」

ドンッ！

「グッ！！」

銀狼は鎖を思いつきり引かれ地面に叩き倒される。

「…吸血鬼は、血がすきなんだよな？」

「何？…。」

「狼の血でも反応するのか、実験してみるか。」

「！？…。」

「じゃあ、死んで。」

グサッ！！

「！？…。」

ドクンッ!

「!?!?。」

廊下を止まる雪乃。

「どうかしたのか?」

「…ううん。なんでもないよ」「ニコッ

雪乃と静はロビーに戻る途中だった。

なんだろう?…胸騒ぎが治まらない。

「銀狼…。」ボソッ

「グアアアアアアアアア!!!!!!!!!!」

「狼も所詮は死神には勝てない。」

銀狼は片目から血を流していた。

死神に片目を刺されたのだ。

「…グッ!…貴様。」

「吸血鬼はまだか?」

死神は鎌についている血を見て微笑む。

「狼の血も哀れだな。」

「グッ!…ハア…ハア…ハア…ハア。」

死神は鎌についている血を指につけ舐める。

「吸血鬼はこんな血を欲するのか…それなら簡単だな。」

「…ハア…ハア…ハア…。」

「狼、貴様の血は役立つな。」

「何?……。」

「貴様を血を全て貰うという事だ。」

「!?!?……。」

死神は鎌を銀狼の上に掲げる。

「…死ぬ。」

「!?!?……。」

グサツ!!!!!!

血が流れたれていた。

地面が血に染まる。

「詩雅野?……。」

「……。」

詩雅野は、静の横を通って行った。

「!?!?……詩雅野!?!?」

静はそんな詩雅野を追った。



詩雅野の瞳は真っ赤に染まり、漆黒の髪に染まった。

「吸血鬼。」

「……ははははは、俺。ちょっと怒ったぞ?」

「死神に勝てると思っているのか?」

「ははははは、お前も吸血鬼に勝てると思ってるのか?」

「何?」

そして、詩恋の姿が消えた。

「なっ!?!?……。」

グサッ!!

「!?!?……。」

「……遅い。お前は俺には勝てない。」

バタンッ

死神は血を流して、倒れた。

ドクンッ!

「!?!?……グッ……。」

「詩恋!」

「……近づくな!」

「!?!?……。」

詩恋は頭を抱えて座り込む。

「グッ!……ハア……狼……。」

詩恋は自分の手首を切り血を出す。

それを銀狼に飲ませた。

そして、銀狼の傷は治って行った。

「詩恋。」

静は近づこうとする。

「悪い……しばらく……家出する。」

「あっ!詩恋!」



詩恋はそのまま消えてしまった。  
そしていつの間にか死神も消えていた。

#25 死神・一人

『詩恋！僕はどうしたらいい！？』

分からない。

『何でだよ！』

俺に言われても分からない！

『それじゃあ…静を助けられない！』

お前が、静あいつから離れたらいい。

『…僕は……。』

ハッ！？

「！？…。」

詩雅野は公園のベンチで寝ていた。

「…。」

詩雅野は辺りを見渡した。

誰も居なかった。

すっかり朝になっていた。

「…詩恋、今日一日だけ、変わってくれないか？

不安でしようがない。」

『了解。』

詩恋と詩雅野が入れ替わった。

「それにしても、人間は昔と変わらない。」

『当たり前だろう?』

「そうだな。」

「拘束しなさい!」

「?!...。」

ジャリッ!

「何ッ!?...。」

詩恋が鎖で手を拘束された。

「チッ...ふざけるな!!!...!!」

詩恋がヴァンパイアの力を少し引き出して鎖を引きちぎる。

「炎舞!捕らえなさい!朝に力を使うとは哀れな!」

そして、炎の刀を持つ、男が詩恋を捕らえる。

「精霊かグッ!...ゲホッ!」

詩恋が血を吐く。

「やっぱり...無視しすぎたな。」

「詩雅野!帰ろう!」

「はあ?...。」

精霊を操っていたのは、闇香だった。

「詩雅野!皆心配してるんだよ?お願い!」

「...俺が帰る理由すらない!お前も本当はヴァンパイアを化け物としか...。」

金なんかとしか見てない!愚かな人間なんだろう!」

「!?...。」

「人間なんて…全員そうだ。」

詩恋はそのまま消えてしまった。

「詩雅野…どうして?…。」

俺は間違っているのか?…。

『詩恋…僕の居場所ってどこなのかな?…』

それは…。

#26 記憶・過去の人 1

また、聞こえてきたんだ。

あの声が…僕を恐怖に貶める声が…。

『化け物！出て行け！』

『キヤアアア！！！化け物！血を吸われるわ！』

”化け物”それが…僕の記憶の無かった時の名前？…。

『詩雅野！』ニコッ

あいつも…僕の事を？…分からない！

分かりたくない！

知りたくない！

知るのがとても怖い！

記憶なんていららない。

だから…僕の事を…誰か…助けてくれ…。

「詩雅野。起きて！」  
パチッ

「ん?。」

詩雅野が目を覚ます。

そしたら、知らない少女が居た。

「誰?」

「詩雅野!」

「うわあ!」

少女が詩雅野に抱きつく。

「何?って誰だよ!あんた!」

「覚えてない?」香奈。<sup>かな</sup>「ニコッ

「!」?」香奈?。」

「うん!」ニコッ

香奈:。

「!」?。」

「どうかしたの?詩雅野?」ニコッ

「別に。」

「詩雅野!どうして、ここに居るの?」

「僕はちよつと一人でいる。」

「大丈夫!詩雅野には私が居るよ?」ニコッ

香奈は詩雅野と仲がよかった。

「はあ!もう、糞は本当に人使いが荒いんだから!」?」ん?」

麗が公園の前で止まる。

「詩雅野君?女の子と一緒に居るの?」

麗は驚く。

公園のベンチで詩雅野が少女と笑っているから。

「急いで!静に知らせないと!」!」!」!」

麗は急いで帰った。

「…?。」

「詩雅野！行こう！」

「どこに？」

「どこかに！」ニッコシ

「分かった…。」

香奈は詩雅野の手を引っ張ってどこかに行った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4316y/>

---

赤の破壊者

2011年12月11日12時54分発行